

目的 小袖の上からはおり着る衣服として近世初期には、塵よけ、くつろぎ着等、実用本位の男子の略装であった羽織は、享保の頃より礼装としての用途も担うようになった。そうした変遷の中で、形態や材質の他意匠においても、江戸時代を通して様々な流行を見ることができる。そこで本研究では、江戸町人の羽織の変遷に着目し、明和から寛政年間に流行した羽織の丈、材質、表地及び胴裏地の意匠を明らかにするものである。

方法 遺品が少ないため、次のような資料を用いて考察を進めた。文献資料としては、当時江戸地本の中軸であった草双紙の一種である「黄表紙」、及び遊里文学として発達し小説的構成をとる「洒落本」の他、「咄本」、「随筆」等を用いた。絵画資料としては、文献資料の「挿絵」、及び「浮世絵」を用い、それぞれの資料を総合して検討した。

結果 羽織丈は、安永・天明年間に蝙蝠羽織と呼ばれる短いものから長羽織へと移る。材質は、縮緬や羽二重の他綺の絹織物が多く、夏には絹や紗の単衣羽織も用いられた。表地の色は、黒、茶、藍、空色等多様であるが、「とかく吉原は黒仕立がよい」と言われるように、黒を主とするのが当時の通人好みの風俗であり、黒の中にも、黒縮緬、黒郡内黒りうもん、黒八丈と様々な黒が見られた。

このように表地が地味になると一層裏に凝る風潮が生じ、流行の浮世絵師による描絵や高名な遊女の書等も胴裏にされている。特に遊里における着脱時に、またさりげなく屏風に掛けられた時に、初めて人の目に触れる裏にまで心を配り、趣向を凝らすことが、当時の粋の精神の現れであったと考えられる。